

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 0839 021128



会報

松門

松陰先生の

身体的生命・精神的生命



松風会理事 三輪 稔夫

松陰の生涯は僅か三十歳であったが、その生は充実した憂国の日々であり、時代と世界の高さを求めての歴史意識・人倫意識の想像と創造との志の実現であった。玖村敏雄先生が晩年しばしば引き合いに出されたスペインの哲学者オルテガの『大衆の反逆』の思想を一〇〇年も前に実行に移した松陰の俊傑を改めて思わざるを得ない昨今である。

人間の意識的行為は、その人の精神が命じて身体が実行に移すことである。身体が知覚し、知覚によって精神が判断し、判断の決定は身体に命じ、そこで実行に移す。要するに身体が精神に、精神が身体に還流する、この循環の全過程が生命であり人生である。意識とは循環に伴う摩擦熱と考えてもよい。同様な意識的行為を繰り返すと、摩擦熱は極小となり、無意識状態となる。松陰の聖經賢伝や遊歴

による学問は、精神の無意識状態までへの感動や反省、直観や努力が注がれた結果である。生涯忘れられることのない記憶や実行の根基となった。身体に根付いた精神を心とも魂とも呼ぶ。松陰は更に誠と言って

「講孟余話・滕文公上・五章」で、松陰は親を葬る至情を述べて次のように認めている。「蓋し情の至極は理も亦至極せるものなり。余常に謂へらく、凡百の事皆情の至極を行へば仁用ふるに勝たべからず。特に葬祭祈禱等の事、皆至情に出づるなり。夫れ人死すれば魂は天に帰し魄は地に帰す。葬ると葬らぬと、祭ると祭らぬと、死人の心に於て曾て関係あることなし」としながら、



左 留魂碑。右 終焉之地碑
(東京都文京区日本橋小伝馬町)

人情として故人の生前を思い起し、その事業や書き物、使用した器物にまでも敬慕の念が湧く。魂は精神をつかさどるたましいであり、魄は肉体をつかさどるたましいである。

昭和の文豪小林秀雄は、『オリンピア』や『当麻』において、身体は精神によって一定の形を示すことからして、何を考えているかわからない無形の精神をして身体という確実なものに思いをせ形成を貫く。更に『歴史について』や『無常という事』において、死者は生者からすれば時間の途中でその存在を完了したからこそ堅固にして動じないのであり、時間の経過とともにますます堅固さを増していくものと考えられる。

この二点は全く松陰の生き方とその魂の影響を如実に代弁している感強くする。

松陰の精神ないし心は、西欧近代の科学技術を羨望してはいたが、その域には及ばなかった。

それは、日本独特の感性と呼ぶべきものであった。科学技術や実利経済は悟性ないし知性の範疇に属す。知性の開発も大事であるが、伝統的な感性の育成こそ今日の急務である。日本学術会議会員井口潔博士の『二十一世紀に生きる智慧』を紹介しておく。

紙数の関係で『留魂録』関係にとどめたい。松陰にとって留魂とは、言葉で書き残して国民の魂の中に刻印することである。

「若し同志の土其の微衷を憐み継紹の人あらば、乃ち後來の種子未だ絶えず、自ら禾稼の有年に恥ぢざるなり。同志其れ是れを考思せよ。重々しく垂れた稲穂を松陰一生の姿であると見た。

松門の双壁の一人、高杉晋作は、元治元年（一八六四）六月、野山獄中で読書に専念中同囚の疑念に答えた内容を『東行先生遺文・獄中手記・六月七日』に書き止めている。晋作は松陰の江戸獄中からの教を「先師の言と真に符節を合するが如し」と。松陰の死は、ソクラテス・キリストの死の如く、感性の熟した自己否定そのものであった。

魂を揺り動かす教育

…松陰先生の「誠」から学ぶ…



松陰研修塾 松本 芳之
(萩市立三見中学校)

はじめに

先日、書店で「二十一世紀は心の時代になる」との一文を目にした。確かに、「技術革新の世紀」とも言える二十世紀は我々に多くの物質的な豊かさをもたらした。しかし、一方でそれだけでは満たされない心の貧しさ空しさに現代人は気づきつつある。教育現場でも、心を病んでいる子供達は非行、不登校など多くの社会現象となって噴出してきている。そのような中で教育界では「心の教育」「情の教育」の必要性が一層叫ばれるようになってきた。

松陰は百三十年前の人であったが、現代人にこの「心のありよう」について多くの言葉を残している。その内容に触れるたびに、時に政治的には、状況判断の甘さを指摘される松陰も心において、まさに充実した生涯をおくったように思えてならない。そして、この「心のありよう」が教育者として、塾生の魂に灯をともしたのであろう。

海原徹氏は著書の中で「これ程相手の心を揺さぶり、魂に働きかけることに成功した魅力的なパーソナリティを我々は知らない」と松陰像を述べている。しかも、そこにある松陰の「魂への働きかけ」は、教育を通して、松陰自身の誠を磨くことによって行われたのである。松陰は黙々と往復書簡において次のように述べている。

上人の心は一筆一人を誅し、吾れの心は一誠一人を感じせしむ。一誠兆人を感じせしむ。

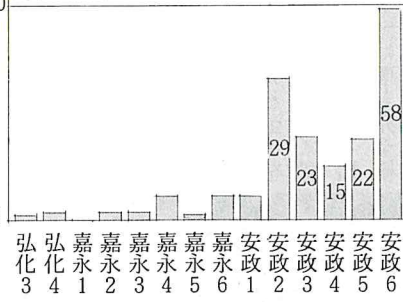
ここには、松陰の「誠」による感悟主義が貫かれているのである。このあたりに、他に比類できない魅力の本質をもっていると考ええる。

本稿では、「魂の教育」の秘密を松陰の「誠」観に求めて、教育者としての魅力、塾生たちと与えたあの感化力の秘密を探ってみたいと思う。

一、誠の時代別頻出数
 松陰の著述の中には、「至誠」「誠意」「誠心」「積誠」「誠」とい

う言葉が頻繁に出てくること、また松陰が塾生に至誠の大切な事を説いたことは周知の事実であろう。松陰は「誠」という言葉に特別な信頼をおいていたことは確かである。松陰の「誠」を引用した語句は、生涯を通じて一八六件見られ、それを頻出数によって時代別に分析すると次のようになる。

時代別「誠」頻度表
 (単位：件数)



松陰の「誠」は、安政二年と安政六年の獄中期に頻出数が突出する傾向にある。このことは、

松陰の誠が孤独な自己との葛藤の中で苦しみ、思索した所産であることを意味しているように思える。両期に共通する松陰の「誠」観は、

仁を爲は己れに由る、人に由らんや。誠なるかな此言や。と言うように主体的な自己の生

き方として捕らえられており、また、下田獄中の歌にあるように、

世の人はよしあしことも云はば言へ賤が誠は神ぞ知るらん
 と言うように強烈な自己主張を内包したものであったと言えよう。

二、「大学」における「誠意」

松陰の「誠」の引用が初めて現われるのは、弘化三年五月の「今公、幕府の鞍鐙の賜をうけたまへるを賀し奉る詩の序」においてである。ここでは、「治人」としての藩公の「誠敬」を称えている。また、嘉永四年「上書」である「文武稽古萬世不朽の御仕法立気附書」において、

文学の士は、誠意正心修身齐家
 の学において兼て心を潜め居り、心術の工夫精密にして、他日官に臨み功績を立て申すべく候。

った。松陰は明倫館兵学師範として教育における「修己」を、また、三民の長である武士の自覚として「治人」を「誠意正心」の学に求めて説いたのである。

三、「中庸」における「誠」
 松陰に取って誠はどのような位置付けがなされているのであろうか。「講孟余話」に次のように、述べられている。

中庸の開巻に天命これを性と謂ひ、性に率ふこれを道と謂ひ、道を修むるこれを教と謂ふと云ふは、明かに孟子の本づく所なり。故に孟子の学は先づ性善を認むるを以て本とす、四端の説・孺子井に入るの説・乞人も屠しとせざるの説皆性善を認むるの術なり。苟も性善を認め得ば、是より涵養して徳を成すに至るべし。とあり、さらに

徳とは此の道を行ひて心を得る事なり。業とは此の道を行ひて成功あることなり。誠とは此の道を専一眞實に行ひて息まざることなり。

とあることから、天↓性↓徳↓道↓誠という、思惟方法が考えられる。つまり、天と人との一体化の中で、性善が出現し、これが徳となり道となる。そして、

誠とはその徳の道を「専一眞實に行ひて息まざる事」なのである。これは、「中庸」に述べる「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり」と説いているのと同様であって、松陰の誠は、天人合一、物我一体の枢機なのである。さらに、具体的に「誠」を実現する方途として述べるのが「將及私言」である。

誠の一字、中庸尤も明らかに之を洗發す。謹んで其の説を考ふるに、三大義あり、一に曰く實なり、二に曰く一なり、三に曰く久なり。

このような、「誠」観は松陰の思想の原理基準として作用し、そして、非常に実践的な色彩を深めて行くことになる。

四、死生観と純粹性

安政六年の政治的蹶起の失敗は、松陰の「誠」観を質的量的に拡充深化させていくのである。この時、松陰が見いだしたのが「至誠にして動かざる者、未だ之有らざるなり」の孟子の一句であった。生涯を通じて松陰が引用したこの一句は、同年の五月の東行前から、遺書とも言うべき「留魂録」までが最も多く語られている。五月十六日の「東行前日記」には、次のように述べるのである。

孟子曰く、至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなりと。其れ是れのみ。諸友、其れ之れを記せよ。

また、死期を悟った同年十月二十日には、

平生の学問淺薄にして至誠天地を感格すること出来申さず。として、内なる「誠」が「天地を感格」できなかつたとしてい。再び我が「誠」で天地や人を感じせしめようとする態度に変化して行くのである。

同時に、入江杉藏に宛てた書簡の中で、

頃る李卓吾の文を読む、面白き事沢山ある中に童心説甚だ妙。童心は真心なり。

と述べ、「童心」を「死」を賭けても「大節」を守り抜こうとする純な心と解釈している。松陰は「童心」||「真心」||「眞誠」と捕らえることを可能としたのである。孤独な自己の葛藤の中で、自己の在り方を純粹性として「誠」という言葉の中で価値付け見いだしていくのである。

同年五月二十日、東行を目前にした松陰は、入江杉藏宛の書簡に於いて、

吾將に去らんとするや、子遠吾に贈るに死の字を以てす。

吾れ之れに復するに誠の字を以てす。子遠の言大いに是れ理あり。若し誠字にして未だ遂げずんば或は頭巾の氣習あらん。

と言い、「死」と「誠」とを対比させているのである。松陰にとって「誠」は、「死」を乗り越える概念として規定されており、「死」もまた「誠」によって克服されるのである。孤独な死を眼前にした松陰が、自己の内から醸し出した「誠」は、塾生にとつて松陰の死と同様な重みを持つて塾生たちの心を揺り動かしたのである。事は、ほぼ間違いないであろう。

五、松陰の誠観の変遷

松陰の「誠」観の変遷は、『大庸』の「誠意」から出発し、『中行合一』『無私性』などの「誠」観の独自性を拡充させ、自己の「純粹性」を強調する「誠」観へと深化されていくと言えるであろう。そして、その「誠」観の特質は、自己の内面性の外に規範的原理を認めず、あらゆる価値判断の基準を自己の内面性に求めようとしたといえるであろう。これが、松陰の「誠」であった。それは、自己の獲得した内的眞実に絶対の価値を与え

ることでもあり、その内的眞実を支えるものが「天」であり、そこから醸し出される「誠」であったのである。よって、松陰は「誠を天地に立て」「至誠天地を感格する」というのである。松陰にとつて「天」は「天に心ありて吉凶禍福を人の善惡に因りて夫々に降し賜はることの様に思ふは大いに誤也」という存在であつて、もつぱら「人力に叶はぬ」ことに限定されているのである。己の人力を前提とした原理基準は、松陰の行動規範に固有性と獨創性をもたらすのである。ある面では松陰の「誠」は非常に主観的にならざるを得ない。しかし、このような自己の動機の無私性と純粹性のみ正統性の根拠を求め松陰の「誠」観は、その純粹さゆえ人々を感動せしめたと言えるであろう。

松陰は「誠」で塾生を教育し、「至誠」で死生・草莽崛起論を説き、自己の志を塾生に託そうとしたのではないだろうか。そして、「死」と「誠」を同一視させたことが、後の塾生たちに強烈なインパクトを与えた感化力の秘密だと考える。おわりに

松陰の「誠」観を駆け足で概略的に述べてみた。私はこれら

の中から、今日の教育課題として次の点を痛感させられた。

①生き方の自覚を促す
教育は知識・技能の伝授だけではない、魂に灯をつけることである。それは、塾生自身の「生き方の自覚」を促すものである。

②教師の魅力
教師は教師である前に一人の人間として、自己の「誠」(心・真心)を問ひ直す必要がある。それは、教師自身の心の葛藤によって磨かれる。これが、松陰の人間の魅力である。

③心は心で育つ
教育技術は心を陶冶する手段の一つであつて、それがすべてではない。塾生はあくまでその技術にではなく、目の前にいる教師自身の情熱と気魄そして人間性に心を揺り動かされたのである。その時、心が育つ機会が訪れる。

松陰が「我が師」と呼んだ佐久間象山は「西洋の技術、東洋の道徳」と述べたが、松陰の生きた時代の儒教思想の中には、現在の我々が忘れてしまった貴重な「心」が埋藏されているように思えてならない。

浅学の身への先達の御叱正を心から願つてやまない。

幕末動乱期における理想と現実の相剋

— 海外渡航にみられる志操 —



松陰研修塾 福岡 正昭

(山口大学教育学部附属山口小学校)

一、「四境の役」の逸話

歴史というものを考えると、いつの世の人々も、日々の生活に忍従しながら、明日に夢を託し、そして後世への橋渡しをしてきている。

「お打ちなさるな、お打ちなさるな。」と呼ばれるりつつ、半ばに達した時、竹藪の中より小銃が一斉に火を吹いた。……



今から、かれこれ数十年も前になるでしょうか。玖珂郡の和木小学校に勤務していた頃、安禅寺に眠っている彦根戦士之墓と刻まれた石碑に興味を持ったことがある。この墓は、和木町民によって百年以上もの間、献花が絶えることなく大事に守られてきたのである。

しかも、「四境の役」当時にかつては、敵方の武将であり、それが何故、敵地に安置されていたのであろうか。

慶応二年（一八八六）六月十四日の朝、小瀬川には河霧がたちこめ、向領に散開した彦根勢が不気味に動いており、やがてその中より赤い陣羽織をつけた武者一騎、対岸の大竹より封書を差し上げ、川中へ乗り入れ、

法要も済ませましたが、これも芸州の滞陣なら是非もない、戦功をたてられ、一日も早く帰ってきてほしい云々。」

この手紙を読んだ清兵衛も、実は最近息子を失ったばかりで胸中察して涙したという。

この話を単に美談として語るには後めたく、何かに惹かれる思いで彦根を訪ねてみることにした。

彦根でお会いした郷土史家、久保田氏の話によると、彼の生家は、彦根城の堀の側にあったが七郎兵衛亡き後、一家は散り散りになってしまったということである。そこで、お話を伺った内容は、次の様なことであつた。……

『幕末の動乱期を境に、萩とは対照的に彦根は没落の一途を辿っていた。時の大老井伊直弼（彦根藩主）が、桜田門外で水戸藩士等の凶刃によって倒れた（一八六〇）。当時大名の不慮の死は、お家断絶が幕府の大法であった。彦根・水戸藩の激突を恐れた幕府は、彦根藩の安泰の密約を無視し、桜田門外の変は朝廷の許しもなく勝手に日米通商条約に調印した責任と、安政の大獄で「無実の者」を罰した

罪と表向きにはなっているが、実は水戸藩の押す一橋慶喜を退けて、家茂を將軍に押ししたことに対する報復を行った。

もはや、諸藩の先鋒といった栄光の地位は消え失せ、以後明治迄の六年間、消えた十萬石を求めて時には幕府、時には朝廷の命ずるまま、彦根藩の武士たちはお家安泰を願いつつ「お守袋」を背に各地に出兵したが空しいあがきにすぎなかった。』

このような内容を、涙ながらに切々とお話され、郷土をこよなく愛された同氏も、最近亡くなられたとのことである。

彦根藩が第二次長州征伐『四境の役』に参加したのはこのような苦しいお家の事情からであった。歴史というものは、当事者でなければその真実を伺い知ることとはできないものであろう。

だが、私にはなぜか『安政の大獄』を断行した井伊直弼亡き後の彦根藩、そしてこの小瀬川で無念の一片の和歌を詠んだ、吉田松陰に魅せられその当時に足を踏み入れてみたくなった。

夢路にも、
帰らぬ関を
打ち越えて、今を限りと

渡る小瀬川



二、海外渡航に夢を馳せる

二人の人物

この江戸送りを逆上ること数年、アメリカ使節ペリーの黒船来航（一八五三）により、佐久間象山の門に入り、洋砲及び西国の兵法を学び、海外渡航計画を着々と練っていた一人の人物がいた。

「佐久間象山の門に入り砲術を學ぶに及び象山余に謂て曰く、砲術は未なり、洋學は本なり、吾子の如きは宜しく洋學に従事すべし。」

この人物こそ、西村茂樹であり二十六歳の時、佐倉支藩佐野候の付け人となり、用人上席として堀田候へ奉仕することとなる。この年の六月、藩としての対応を迫られ、事態の急変に敏

— 周東町松陰会の歩み



様々な実践活動を通して学び、松陰精神の顕彰普及に努める

代表 平田 光寛

(岩国市立吉国中学校)

一、読書会から松陰会に

この会が結成されたのは昭和六十三年九月である。県内にある吉田松陰研究グループのなか

にあってはまだ新しく生まれたばかりと言ってよいであろう。しかし、その前身は昭和五十九年に溯る。当時の周東町教育委員会教育長をはじめ町内の教員や一般社会人で読書会が始められていた。佐藤一斎の「言志録」をテキストとして、約二十名の参加で盛会裡に進められていたのである。このように学ぼうとする良き雰囲気の中にあつて周東町松陰会の結成が実現したのである。結成大会は周東町全域に呼びかけられた。

松陰研究家で知られる三輪稔夫先生を講師として招き、中央公民館で盛大に挙行された。約七十名の出席者を得て、この会がスタートすることになった。以後、毎月第二火曜日を例会日として今日まで欠かさずことなく継続している。毎回の出席者は

数名の時もあり、十数名を教えることもあつた。結成当初は松陰先生の様々な著作に及んだが、結局その代表的著書である「講孟余話」を輪読することに落ち着いた。現在四年を経て、講談社学術文庫「講孟割記」下の巻の四の上に至っている。みんなで音読し、解説は輪番制で行い、後はそれぞれが感想を述べあうのである。遅々として進まない一つはその文から今日の政治、教育など多方面に渡って話が弾むからである。後何年で全てを讀み終えるかわからないが、始めたからには読破しないわけにはいかない。「講孟割記」を讀まずして松陰を語るなかれではないが、一応全巻を音読したことは、たとえその内容を十分に理解できていなくとも、松陰先生の言霊はわが心の内に留まるものと確信するのである。

二、「宿泊之地」石碑建立

国史上のいわゆる読書家と言われる数多くの中に松陰先生も

当然入るわけだが、どちらかと言えば実践行動派と言った方がよいのではないか。輪読をしつつ常に思うことは、その国を愛う行動力の凄さである。我々も『やむにやまれぬ』ではないが、松陰先生の精神顕彰のために何かできることはないか、会話は

そのことに及ぶこと度々であつた。本会の輪読と機を同じくして「松陰の道」の調査が山口県教育会で鋭意進められていた。調査員が加わつていた。調査の結果、わが町周東町に松陰先生の宿泊された家屋が残っていることが判明した。行動はすぐに起こされた。石碑建立の計画は急速に具体化された。町民からの募金は勿論のこと町外からも多くの浄財が

寄せられ、平成二年十月二十七日(この日は松陰先生の命日)ついに除幕式を周東町長はじめ多くの参列を得て迎えることができたのである。この年は松陰先生生誕百六十年の記念すべき年でもあつた。



松陰先生が嘉永7年に宿泊された家



石碑建立除幕式 平成2年10月20日

この家屋は、松陰先生が下田での海外渡航に失敗して蟄居を命ぜられ金子重之助とともに萩へ護送される道すがら、嘉永七年(一八五四)十月二十日、旅籠亀屋で一夜を過ごされた貴重なものである。この事は当事の護送日記に克明に記されている。この家屋前に石碑が建てられたことは、今後の一人一人の勉学はもとより、様々な松陰精神の顕彰活動の大きな励ましとなるものである。



松陰先生と寺嶋忠三郎が無言の別れをした熊毛町呼坂

三、四度行った歩行大会 周東町は山陽道の宿駅である高森市を有していた所である。松陰先生は三度にわたりこの高森に宿泊され、その最初の江戸行きを「東遊日記」に次の様に記している。「八日晴、卯後駄を護る者と駄に先んじて発す。午後高森に抵る。程凡そ四里半と七町。その間道徑平坦、三尾・中山の坂ありと雖亦與し易きのみ。(略)九日晴。笨車暁を破つて発す。松と伴つて辰の中刻に関戸駅に到り餐を伝ふ。その間、坂に金明あり、水に御庄あり、戸口周密せるもの玖珂市・柱野あり、既にして関戸坂を越ゆ、水あり小瀬川と曰ふ。』この松陰先生の追体験をせずにはおれない。俄然第一回「松陰の道歩行

大会」が実現した。ときは平成元年十一月の新嘗祭の吉日であった。町内から正に老若男女三十名が馳せ参じてくれた。熊毛呼坂(中山)から高森までの旧山陽道の散策を楽しんだ。特に安政六年五月幕命により江戸送りのとき呼坂で弟子の寺嶋忠三郎と無言の別れをした所では、石碑に刻まれている二人のこの時のことを詠んだ歌に感銘を新たにしたのである。



第四回は山口県教育会主催の歩行大会に参加させて頂いた。

第二回は高森から御庄までを踏破した。途中の欽明寺峠では松陰先生も難儀したと思われる急坂に喘ぎながら柱野に着き、あの万葉集にある『岩国山』の歌碑の前で昼食をとった時のことは今でも印象深く残っている。

第三回は小瀬川から関戸までを歩いた。河畔には立派な石碑が地元有志の手によって建てられている。夢路にもかえらぬ関を打ち越えて今をかぎりと渡る小瀬川」の歌碑であることは言うまでもない。関戸にはこれも立派な『東遊記念碑』の石碑が建てられている。以上この三回で熊毛呼坂から国境の小瀬川までを踏破したことになり、のべ

参加者は百名に上る。からだ全部で学ぶ喜びをみんなまで共有したのであった。小瀬川河畔に建つ防長との訣別の歌碑

森郵便局のコミュニケーションにおいて開催することになった。展示する約三十五の品々は石碑建立の際に寄付を戴いた残額をその一部に有用させてもらったものである。二週間の展示期間多くの町内外の方々に閲覧頂いた。新聞にも写真入りで紹介された。新聞にも写真入りで紹介された。新聞にも写真入りで紹介された。新聞にも写真入りで紹介された。

一室を貸し切って行われた。又、この展示物は本年(平成四年)には二校の中学校の文化祭にも展示され、好評を博した。

五、講演会活動も四度行う

昭和六十三年の結成大会で招いた三輪稔夫先生、二回目は「松陰と周東町」と題して周東町図書館長である山本哲生先生を、



山口萩往還道の歩行大会に参加

期待をするのは新会員を得ることである。当初の輪読は老若男女で数十名を数えることもあったが、今日では数名で寂しいこともよくあり、悩みの一つである。講演会は町内外に呼びかけるが、共に学ぶ若き仲間を得ることが最も望む会員の願いであり、松陰先生の精神顕彰の一番重きをなすものと思っている。今後一年一回は開催し、志ある隠れたる人に出会いたいと思う。



高森郵便局で行われた松陰展

三回目は現在山口高校教諭で松陰研究家若手ナンバーワンの川口雅昭先生を、そして、平成四年には折本章先生(桜田中学校教頭)に「吉田松陰を生かす道」と題して講演して頂いた。これらの諸先生方から多くのことを学んだことは言うまでもないが、

六、『松陰会だより』の発刊 この会が結成されて三年目にして、やっと会報が出せるようになった。三年間学び続けてきたものを形に残すことによって、一層の勉学の糧にし、又、会報を広く頒布することによって、松陰精神の恢弘はもとより、松陰を学ぶ同志を求めたいと切望するものである。現在、平成五年四月に第四号を発行すべく、鋭意努力しているところである。松陰会だより

『講孟割記』を読む 松陰会だより 第二号 周東町松陰会

七、今後の課題として 「講孟割記」を読了する決意は既に述べたが、今後はそれだけではなく、松陰先生の著作以外にも松陰先生もあらゆる分野の学問に挑戦したように。真の人間あり方・国のあるべき姿を求めて、それは仮令一人になってもこの会を維持し続けて、松陰先生に一步でも近づきたいと思う。

「第二次松下村塾と久保家」追記



萩郷土文化研究会会長 田中助一

私は平成四年二月一日発行の「松門」第十四号に、「第二次松下村塾と久保家」と題する論文を出していただいたが、それには、久保家の初代五郎左衛門宗久が、浪人して石州に住んでいたが、萩藩初代藩主毛利秀就の逝去を知って萩に帰り、明圓寺(当時瓦町にあった)において殉死した。と書いた。

ところが平成三年二月一日徳山市のマツノ書店より復刻された「長周叢書」の中の、和智東郊著「虚実見聞記」にこの殉死の記事があり、「久保五郎右衛門寺、妙圓寺」となっている。

更に「久保者牢人にて芸州に居、御逝去聞伝立帰願にて御供士に被仰付、五十石被下御礼申上候て、正月十二日切腹、介錯三保勘右衛門」と書かれている。

それで「萩藩譜録」の久保五郎左衛門久参家の分を見ると、石州に住んでいたと書いてあるので、この方を取ることにする。初代宗久の妻は萩西光寺開基友玄の妹である。

二代久継の妻は萩明圓寺二世祐叔の女である。三代久参は二代久継の二男である。妻は三戸久右衛門幸春の養女、実は黒川の庄屋森田長右衛門の女である。四代久春は三代久参の長男で、母は三戸久右衛門幸春の養女、実は黒川村の庄屋森田長右衛門の女である。

第八回 「松陰教学研究会」 (報告)

一、主題
吉田松陰の甦る道を求めて
一松陰教学精神の追究

二、参加者 小・中・高校等
管理職三二名

三、期日・内容
平成四年十二月五・六日
(1)心の教育・情の教育
(山口県教育委員会重点施策) 指導課 長谷川真幸殿
課長補佐 謙司殿
主 幹 室

(2)シンポジウム
現代の家庭教育・学校教育
杉家の家風と村塾教育
(前山口県立山口博物館長) 指導助言者 石原啓司殿
(美祿市教育委員会教育長) コーディネーター 朝廣廣志殿
(徳山市立徳山小学校長) シンポジスト 重田純堯殿
(山口市立瀨上中学校長) 同 西本正彦殿
(山口県立響高等中学校長) 同 吉村洋輔殿

(3)研究協議
○小・中・高校種別分散会

○分散会概要報告
○指導講話
「諸生に示す」を読む
山口女子大学名誉教授 河村太市殿

(4)講話
松陰の真髓と教育的遺産
松陰研究家三輪稔夫殿
四、参加者の声
※よかった!! また...

国づくりは人づくり
松陰の識見・情熱・実践を
松下村塾に学ぶ

旧ソ連邦から、市場経済への移行による新しい国づくりを進める為に、日本で研修中のリーダーを萩市へお迎えし、松陰研究についての指導・援助の機会を得た。一概要次のとおり

一、主催者
(東京都中央区日本橋一―四―二) 企業経営責任者育成セミナー
イスクラビジネス・スクール
学長 国際キリスト教大
教授 藤田 忠先生

二、時 十一月七日(土)
三、指導者
松風会理事・松陰研究家
三輪稔夫先生

四、研修生: イスクラ
ビジネススクール第四期生

五、研修内容
九:〇〇~十九:〇〇
小郡駅―萩市―小郡駅

六、松陰研究推進基盤整備事業
松陰研究テキストの編集
機関誌「松門」刊行二回
研究相談・資料展示
研究図書整備・利用促進
松風寮跡碑の建立
◎ふるって御投稿をお待ちしています。



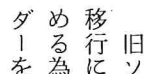
○ロシア 四名
○キルギス二名
○カザフ 一名
○ラトビア三名
○モルドバ一名
○通訳ほか二名



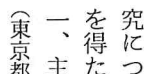
○小郡駅―萩市―小郡駅



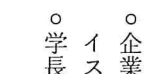
○三輪稔夫先生



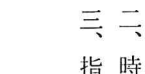
○三輪稔夫先生



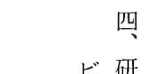
○三輪稔夫先生



○三輪稔夫先生



○三輪稔夫先生



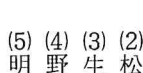
○三輪稔夫先生



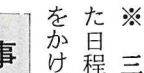
○三輪稔夫先生



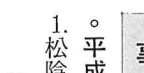
○三輪稔夫先生



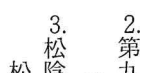
○三輪稔夫先生



○三輪稔夫先生



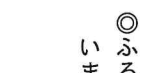
○三輪稔夫先生



○三輪稔夫先生



○三輪稔夫先生



○三輪稔夫先生